主 題：ヤコブの母 リベカ
 聖書箇所：創世記 24 - 27章

今日、私たちは旧約聖書の創世記の中から、一人の愛すべき女性のことを学んで行きます。彼女は信仰の父アブラハムの息子イサクの妻リベカです。彼女のことは、創世記24章から27章に記されている訳で、非常に長い箇所です。そのすべてを今読むことは出来ませんが、お帰りになってから、ぜひ、その箇所をお読みください。このリベカ、すばらしい女性です。しかし、私たちと同じように罪深い者でもあります。彼女の歩み、そして、彼女の失敗は私たちに大切なレッスンを教えてくれます。イサクが愛したこのリベカはいったいどんな人だったのでしょうか？信仰者としてどのような歩みを為したのでしょうか？そのことをごいっしょに今から見て行きましょう。

☆リベカ

1. その出自

まず、私たちはこのリベカという人物の素性を知りたいと思います。彼女は「**アブラハムの兄弟ナホルの妻ミルカの子ベトエルの娘であった。**」と創世記24：15に記されています。ナホルはアブラハムの兄弟に当たります。アブラハムの父テラには三人の子どもがいました。アブラハムとハランと、そして、このナホルです。ですから、リベカはアブラハムの兄弟、ナホルの孫娘に当たるのです。彼女には一人の兄がいました、名前をラバンと呼びます。後に、ヤコブがこのラバンに仕え、彼の娘レアとラケルと結婚をして行くようになります。彼らが住んでいた場所は、現在のシリアの北、トルコの南部に当たる場所ですが、その地域に住んでいたと記されています（アラム・ナハライムのナホルの町）。さて、そのような背景を覚えた上で、このリベカがどういう人物だったのかを見て行きます。創世記24章11節からみことばを見ますが、その前に少しだけ背景を説明しておきます。アブラハムはこのとき140歳でした。そして、神の奇蹟によって与えられたイサクも40歳になっていました。アブラハムは何とかイサクのために嫁を迎えたいということで、アブラハムの故郷へ彼のしもべの一人を遣わすのです。このしもべの名前は記されていませんが、15章の2節に出て来る「**エリエゼル**」がその人物ではなかったかと言われていています。彼はアブラハムの「**全財産を管理している家の最年長のしもべ**」（創世記24：2）であったとあります。アブラハムが非常に信頼を置いた、忠実なしもべでした。アブラハムはそのしもべをイサクの嫁を探すために送り出すのです。というのは、神はアブラハムにすばらしい約束を与えました。それはこのアブラハム、イサクから子孫が地の砂のように空の星のように増え広がって行くという契約でした。その成就是まだ見ていません。それでアブラハムはこのような計画を立て、このしもべを自分の故郷であるメソポタミアの方に派遣しようとするのです。

さて、「**彼は立ってアラム・ナハライムのナホルの町へ行った。**」と10節にあります。先ほども話したように、今のエルサレムから北の方に向かって行きます。570キロぐらい北に上がった所、恐らく、その辺にあった町だろうと言われていますが、トルコの南部であり、現在のシリアの北に当たります。そこにやって来た時の出来事です。

「**11 彼は夕暮れ時、女たちが水を汲みに出て来るころ、町の外の井戸のところ、らくだを伏させた。12 そうして言った。「私の主人アブラハムの神、主よ。きょう、私のためにどうか取り計らってください。私の主人アブラハムに恵みを施してください。13 ご覧ください。私は泉のほとりに立っています。この町の人々の娘たちが、水を汲みに出てまいりましょう。14 私が娘に『どうかあなたの水がめを傾けて私に飲ませてください。』と言い、その娘が『お飲みください。私はあなたのらくだにも水を飲ませましょう。』**と言ったなら、その娘こそ、あなたがしもべイサクのために定めておられたのです。このことで私は、あなたが私の主人に恵みを施されたことを知ることができますように。」**15 こうして彼がまだ言い終わらないうちに、見よ、リベカが水がめを肩に載せて出て来た。リベカはアブラハムの兄弟ナホルの妻ミルカの子ベトエルの娘であった。16 この娘は非常に美しく、処女で、男が触れたことがなかった。彼女は泉に降りて行き、水がめに水を満たし、そして上がって来た。17 しもべは彼女に会いに走って行き、そして言った。「どうか、あなたの水がめから、少し水を飲ませてください。」18 すると彼女は、「どうぞ、お飲みください。だんなさま。」と言って、すばやく、その手に水がめを取り降ろし、彼に飲ませた。19 彼に水を飲ませ終わると、彼女は、「あなたのらくだのためにも、それが飲み終わるまで、水を汲んで差し上げましょう。」**と言った。**20** 彼女は急いで水がめの水を水ぶねにあげ、水を汲むためにまた井戸のところまで走って行き、その全部のらくだのために水を汲んだ。**21** この人は、主が自分の旅を成功させてくださったかどうかを知ろうと、黙って彼女を見つめていた。」

このしもべは神の前に祈るのです。「どうぞ、あなたがあわれみをもってみこころの人を与えてくださるよう。それだけでなく、私をその人の所に導いてくれるように。私がおその人をしっかりと見つける

ことが出来るように。」と。そして、神がすばらしいみわざをなさったのです。ここに現われた一人の女性、リベカと呼ばれるこの人はどんな人だったのかここから少し見る事ができます。まず彼女は、非常に美しい人物だったと16節に記されています。また同時に、彼女がこのときにしていたことによって非常に勤勉な人であったと見る事が出来ます。彼女は自分の家族のために熱心に働いていました。水を汲みにやって来ていました。また、このアブラハムのしもべと出会った時に、全く初めて会うこの旅人に対して礼儀を尽くしています。彼女の対応の様子を見ると、非常に礼儀正しいです。また同時に、彼女は仕える人でした。彼女は自分のことよりもこの旅人を何とかもてなそうとして、彼の必要を満たそうとしています。ご存じのように、らくだは大変な量の水を飲みますが、その水も供給しましょうと言っています。普通なら、「もうこれ位でいいでしょう、私もまだ用事がありますから。」と言うところです。でも、彼女はこうしてこの旅人の必要を一生懸命満たそうとしました。そのような女性だったということがこの箇所から見る事が出来ます。

2. リベカの信仰

すばらしい女性だったのですが、そのすばらしいところはそれだけではありません。彼女の信仰もまたすばらしいものでした。しもべは、この女性こそが神がイサクのために備えてくださった人物であると確信を持ちました。そこで、このしもべは彼女の家に出かけて行きます。もちろん、彼女も彼女の家族も彼を迎え入れます。しもべはその導きが神からのものであることを確信したので、26-27節「**そこでその人は、ひざまずき、主を礼拝して、:27 言った。「私の主人アブラハムの神、主がほめたたえられますように。主は私の主人に対する恵みとまこととお捨てにならなかった。主はこの私をも途中つつがなく、私の主人の兄弟の家に導かれた。」**と、このような喜びにあふれて神に感謝をささげています。そして、このしもべがしたことがその後に記されていますが、しもべは「このような経緯をもって私はここにやって来た、そして、あなたの妹、あなたの娘を私が観察していると、私が祈ったとおりのことを彼女は私にしてくれた。そして、私はこの人こそがイサクの妻だと確信した。」とそのように話すのです。最後にこう聞いています。49節「**それで今、あなたがたが私の主人に、恵みとまこととを施してくださるのなら、私にそう言ってください。そうでなければ、そうでないと私に言ってください。それによって、私は右か左に向かうことになるでしょう。」**もし、答えがノーなら私は次の所に出て行きますからと、そのようなことを言うのです。すると、リベカの兄であるラバンと父ベトエルがこのように答えます。50-51節「**するとラバンとベトエルは答えて言った。「このことは主から出たことですから、私たちはあなたによしあしを言うことはできません。:51 ご覧ください。リベカはあなたの前にいます。どうか連れて行ってください。主が仰せられたとおりの、あなたの主人のご子息の妻となりますように。」**と。少なくとも、この家族の信仰がここに現われています。彼女の兄もその家族も、これは神がなさったことだ、だから、私たちはそのみこころがなりますようにと、喜んでそれを受け入れようとしています。

ところが、これが聖書のすばらしいところですが、この家族の心情というものもここに見事に記されています。というのは、娘に今日こんなことが起こった、彼女は井戸に行つて水を汲んで家族のために持って帰ることだったのに、突然、求婚されたというのです。家族はびっくりしたでしょう。そこで、55節を見てください。「**すると彼女の兄と母は、「娘をしばらく、十日間ほど、私たちといっしょにとどめておき、それから後、行かせたいのですが。」**とあります。まさか、今日こんなことになるなんて思っていなかった、突然、このような話が降つて湧いたのです。「すみません、娘を送りますが、十日間ほど時間をくれませんか。お別れを言いたいし…」と、このように言うのは理由がありました。この後、娘が出て行くと、再びここに娘が帰って来るという保証は全くなかったからです。だから、もう少しいっしょに過ごすこの時間を楽しませてくださいと頼むのです。ところが、このしもべは「いや、主人の所に急いで帰りたいから帰らせてくれ。」と言うのです。わずか一泊だけです。そこで彼らは57節「**娘を呼び寄せて、娘の言うことを聞いてみましょう。」**と言います。58-60節「**それで彼らはリベカを呼び寄せて、「この人といっしょに行くか。」と尋ねた。すると彼女は、「はい。まいります。」と答えた。:59**そこで彼らは、妹リベカとそのうばを、アブラハムのしもべとその従者たちといっしょに送り出した。:60 **彼らはリベカを祝福して言った。「われらの妹よ。あなたは幾千万にもふえるように。そして、あなたの子孫は敵の門を勝ち取るように。」**、祝福のうちに彼らを送り出すのです。すばらしい信仰だと言う事が出来ます。

しかも、リベカの信仰を見ましょう。リベカもいきさつを聞きました。そこで、彼女が分かったことは「これは主が導いておられる、これは主のみこころである」ということです。その確信をもったので彼女は喜んでそれに従おうとします。先ほども触れましたが、これは非常に大きな決心でした。というのは、しもべといっしょに出かけてしまうと、再びこの地に戻って来ることはできないと、そのようなことも覚悟しなければいけなかったからです。この申し出を受け入れてしまうことによって、大きな犠牲を払わなければいけない、家族という犠牲、故郷という犠牲、何もかも捨てて全く見知らぬ地に出て行かなければいけないのです。しかも、まだ会ったこともない人と所帯を持つなんて不安ばかりです。

そして、特に女性の場合はこのような不安定なことに対してはなかなか積極的になれません。私たちなら「すみませんが写真を見せてください。どのような環境に私は住むのですか？周りには何がありますか？近くにスーパーがありますか？」と、それらのことを調べた上で自分が納得した上でと思いますが、リベカはそのようにはしていません。「神が導いてくださった。だから、私は行きます。」と言っています。このリベカのことを通して教えられることは、神はこのような主のみこころに喜んで従うと言う人を捜しておられるということです。主が喜ばれる人とは、神のみこころに喜んで従って行く人です。そこにどのような犠牲が伴おうとも、主のみこころこそが完全であると信じるゆえに、それに喜んで従って行きたいとする人です。そのような人たちを主は喜び、祝してくださるのです。ですから、このリベカの家族もその通りですし、リベカ自身を見ても、まさに、神が喜んでくださるそのような信仰をもっていただいていることを私たちは見ることが出来ます。皆さん、これはリベカのことだけではありません。今の私たちにも同じことが言えるのです。神が私たちに望んでいることは何でしょう？それは神のみこころに忠実に従い続けて行くことです。別な言い方をすれば、神のみことばに忠実に従い続けて行くことです。イエスを信じておられないあなたに神が望んでいることも同じです。「神のみことばに従いなさい。そして、このみことばが教える、すべてをお造りになり、あなたを造られた救い主、まことの神イエス・キリストを信じなさい、わたしに逆らうことを止めてわたしのところに帰って来なさい。」とどのように命じられているのです。私たちクリスチャンに対しても神は同じことを言われます。「これがわたしのみこころだから、このみことばに従いなさい。」と。

どうですか、皆さん。このリベカのようにいろいろな不安があっても「これは神が与えてくれたものです。神のみこころです。ですから、私は喜んでそれに従って行きます。」とそのような思いをもって歩んでおられますか？

◎神のみこころに喜んで従った信仰の勇者たち

ダビデ：ダビデはそのような信仰者でした。詩篇40：8「**わが神。私はみこころを行なうことを喜びとします。あなたのおしえは私の心のうちにあります。**」、これは時代を越えて神が信仰者に求めておられる心の態度です。「みこころに従います。しかも、喜んで従います。それが私の喜びですから。」と。このメッセージ、このみことばは私たちに、ダビデがどのような人物だったのか、彼がどのようなことを望んでいたのかを明らかにします。みこころを求め、みこころに喜んで自ら進んで従った人物です。

パウロ：また新約の時代になってあのパウロは何と言っているでしょう？パウロはしもべたちに対する教えの中で、エペソ6：6「**人のごきげんとりのような、うわべだけの仕方ではなく、キリストのしもべとして、心から神のみこころを行ない、**」、パウロが勧めたことは、いやいやではなく心から喜んで神のみこころを実践して行きなさいということです。そのように命じるのです。このような命令を与えたパウロがその通りの生き方をしていたということは当然のことです。彼自身が喜んでみこころに従っていたのです。先ほども触れたように、私たちが神から祝福をいただくために忘れてはならないこと、それはみこころに従うということです。あなたが神のみこころに従って行くなら、神はあなたを豊かに祝してくださいます。間違いなく、あなたの生活の中にある葛藤は、神のみこころに従いたいという思いと自分の考えに従って生きて行きたいという二つの思いです。そして、自分の思い通りに歩いて行くという選択をすることも多々あります。でも、私たちがすでに知っているように、そのような選択をした歩みには何の祝福もありません。喜びは長続きしません。しかし、私たちが神のみこころに従って生きようとする時、そこに神の祝福があります。だから、パウロはイエスを信じた後大変な苦しみを経験しても、彼自身の証は「どんな時にも私は救われた喜びをもって感謝をもって生きている。」なのです。ピリピ3：8「**それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損とっています。**」、イエスを信じたことはすべてに勝ってすばらしい喜びである、これ以上の喜びはないと言うのです。「**私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくとっています。**」、この世の名誉も富も、この世の財産も地位もゴミである、そんなものはどうでもよい、なぜなら、それらがもたらす喜びなど一時的なものだ、永久に続かない。でも、神がくださる喜びは永久に続くと言います。皆さんが救われたことを喜びながら感謝しながら歩いて行くために必要なことは、主のみこころに従い続けて行くことです。それしかないのです。

また同時に、あなたが主のみこころに従い続けて行くなら、パウロが言っています。「そのときにあなたには本当の満足がある。」と。同じピリピ4：11に「**乏しいからこう言うのではありません。私は、どんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。**」とある通りです。どのような境遇にあってもです。自分の望みがかなっていない時だけ満足感をもって生きて行けると言ったのではありません。パウロは非常な貧しさを経験し、非常な困難を経験し、孤独も経験しました。ありとあらゆる困難を経験した中であって、彼はこのように証するのです。「あらゆる境遇の中にあっても私は満ち足りている」と。本当の満足は物から来ません。本当の満足は神から来るのです。パウロはそのように主のみこころに喜んで従おう

としました。そこにこそ神の祝福があるからです。みこころに従って行くなれば、神が私の心を救われた喜びで満たし続けてくださるし、感謝に溢れさせてくださるし、そして、私がいつも満ち足りた状態で満足をいただいて歩むことが出来る。このような祝福を私が神からいただいているのは、それは私が失敗をしながらでも神のみこころに従い続けているからだ、パウロはこのように言うのです。

モーセ：旧約聖書にあるモーセはどうだったのでしょうか？モーセも神のみこころに従い続けた人物でした。主ご自身がモーセに関してこのように言います。「**しかしわたしのしもべモーセとはそうではない。彼はわたしの全家を通じて忠実な者である。**」（民数記12：7）。

ヨシュア・カレブ：モーセの後継者であったヨシュア、そして、彼とともに主を仰ぎ主を信頼し続けたカレブに関して、モーセがこのように言っています。「**そこでその日、モーセは誓って、『あなたの足が踏み行く地は、必ず永久に、あなたとあなたの子孫の相続地となる。あなたが、私の神、主に従い通したからである。』**と言いました。」（ヨシュア記14：9）。神の豊かな祝福があると言うのです。それは「**あなたが、私の神、主に従い通したからである。**」と。どうして神はあなたを祝されるのでしょうか？あなたが主に従い通したから、主のみこころを行ない続けたから、あなたが主に対して忠実だったからです。

ルツ：異邦人であったルツを思い出してください。「ナオミとともに私は行きます。」とルツは言いました。ナオミが自分の故郷、自分の神に帰りなさいと言った時に、彼女は「私は家に帰りません。」と言います。ルツ1：16「**あなたを捨て、あなたから別れて帰るように、私にしむけないでください。あなたの行かれる所へ私も行き、あなたの住まれる所に私も住みます。あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です。**」、私はあなたに従います、私はあなたの神を信じる者としてあなたとともに歩んで行きたいと言っています。その忠実な歩みの結果、彼女の名前はイエス・キリストの系図の中に入れられました。このルツからオベデが生まれオベデからエッサイが生まれ、エッサイからダビデ王が生まれて来たのです。何という祝福でしょう！神からの祝福など私たちはだれ一人いただく資格がありません。でも、あなたが忠実に歩み続けて行くなれば、神はあなたを祝福すると約束をくださるのです。そのように生きるかどうかはあなたが決めなければいけないことです。

主ご自身：そして、皆さんもご存じの通り、私たちの最高の模範であるイエス・キリストの歩み、主ご自身の歩みを見たときにどうですか？主は常に父なる神のみこころに従順であったし忠実でした。ヨハネ4：34「**イエスは彼らに言われた。「わたしを遣わした方のみこころを行ない、そのみわざを成し遂げることが、わたしの食物です。」**」、主ご自身が重きを置かれていたこと、それはわたしを遣わした方、父なる神のみこころを行なうことだと言われています。また、ヨハネ6：38でもこのように言われました。「**わたしが天から下って来たのは、自分のこころを行なうためではなく、わたしを遣わした方のみこころを行なうためです。**」。主イエス・キリストは人としてこの世にお見えになった時に、自分のやりたいことをしたのではなく、父なる神が望まれることを行おうとされました。つまり、主のみこころに従おうとしたのです。それが私たち人間に対するすばらしい模範です。主はご自分の生きざまをもって、私たちにも同じようにみこころに従い続けて行くようにと教えておられるのです。その主がマタイ12：50でこのように教えておられます。「**天におられるわたしの父のみこころを行なう者はだれでも、わたしの兄弟、姉妹、また母なのです。**」と。イエス・キリストがそのように生きてただけでない、イエス・キリストを信じる者たちは彼が歩んだように父なる神のみこころに従って生きようとする。ですから、天におられる父なる神のみこころを行う者はだれでもイエス・キリストの家族であると言うのです。

私たちがしっかり覚えておきたいことは、皆さん、残念ながら、私たちは完璧な生活を送れる者ではありません。日々たくさん失敗をしています。でも、そのような私たちでも神の助けをいただきながら、主のみこころに忠実に従って行くなれば、神はあなたを祝してくれるということです。その約束を覚えることです。そして、その歩みを為すために必要な助けを神は備えてくれます。問題はあなた自身がそのように生きようとするかどうかです。「神さま、私はそのように生きて行きたい。それがあなたが望んでおられる生き方であるから。どうぞ助けをください。」と言うとき、神は間違いなく助けをくださいます。そのようにして信仰の勇者は生きています。そして、彼らは私たちと同じように生きて行くことが出来るということを教えてくれています。主のみこころに喜んで従って行く、犠牲があっても喜んで従って行こうとする、そういう人を主は絶対に見捨てないのです。あなたがどのように生きているか、そのことをあなたは考えなければいけません。そして、あなたがこれからどのように生きて行くのか？その決断をしなければいけないのです。

すばらしい信仰を持っていたリベカですが、最初に話したように、残念ながら彼女も私たちと同じように罪を犯してしまいます。25章からそのことが出て来ます。

3. リベカの罪

25：21－29「**イサクは自分の妻のために主に祈願した。彼女が不妊の女であったからである。主は彼の祈りに答えられた。それで彼の妻リベカはみごもった。：22 子どもたちが彼女の腹の中でぶつかり合うようになった**

たとき、彼女は、「こんなことでは、いったいどうなるのでしょうか。私は。」と言った。そして主のみこころを求めに行った。：23 すると主は彼女に仰せられた。「二つの国があなたの胎内にあり、二つの国民があなたから分かれる。一つの国民は他の国民より強く、兄が弟に仕える。」：24 出産の 때가満ちると、見よ、ふたごが胎内にいた。：25 最初に出て来た子は、赤くて、全身毛衣のようであった。それでその子をエサウと名づけた。：26 そのあとで弟が出て来たが、その手はエサウのかかとをつかんでいた。それでその子をヤコブと名づけた。イサクは彼らを生んだとき、六十歳であった。：27 この子どもたちが成長したとき、エサウは巧みな獵師、野の人となり、ヤコブは穏やかな人となり、天幕に住んでいた。：28 イサクはエサウを愛していた。それは彼が獵の獲物を好んでいたからである。リベカはヤコブを愛していた。：29 さて、ヤコブが煮物を煮ているとき、エサウが飢え疲れて野から帰って来た。」。さて、すばらしい信仰者であったリベカ、すばらしい決心をもって主のみこころに従ったリベカでしたが、残念ながら、彼女は罪に陥ってしまうのです。今から四つの罪を見て行きます。そして、この四つの罪はだれにでも起こりうる罪です。

1) 偏愛

一つ目は偏愛の罪です。偏って人を愛することです。主はイサクとリベカに二人の子どもを託してくださいました。双子でした。でも、みことばが教えるように、イサクは兄のエサウを愛し、妻リベカは弟のヤコブを愛したのです。偏って愛したのです。同じように愛さなかったのです。平等に愛さなかったのです。そして、どのような理由であったか分かりませんが、後にエサウがめとった二人の妻はリベカの気持ちを変えることがなかったばかりか、彼らに対する悪い思いをさらに強めたようです。26：34-35にはこのように記されています。「エサウは四十歳になって、ヘテ人ベエリの娘エフディテとヘテ人エロンの娘バセマテとを妻にめとった。：35 彼女たちはイサクとリベカにとって悩みの種となった。」と。ですから、リベカはエサウのことを愛していなかったのに、さらに、この二人の娘たちによって益々彼女の気持ちはエサウから遠のいてしまったのです。しかし、このように偏って人を愛することは間違っています。このようにだれかを特別に愛することは間違っています。なぜ、リベカはこのような信仰者になってしまったのでしょうか？聖書には詳しい理由が記されていませんが、原因の一つとして考えられるのは、二人にはすぐに子どもが与えられなかったことです。イサクがリベカをめとったときは40歳でした。そして、この二人の子どもを授かったのは彼が60歳の時だったと25：26で教えています。20年間、子どもなかったのです。その間にいろいろな思いがあったでしょう。なかなか自分の思い通りに物事が進んで行かないと私たちは神に対して怒りを持つ者です。その問題は、傲慢にも自分の考えが最善であると思っていることです。そのようなことがリベカにあったのかどうか分かりませんが、少なくとも、この間に彼女自身のうちに何かがあったようです。そして、神から託されて生まれて来たこの二人の子どもたちに対して、彼女は偏った愛をもって接するのです。ヤコブだけを愛したのです。

覚えておきたいことは、アブラハムとサラの間にもなかなか子どもが生まれませんでした。彼らは何年間待ちましたか？25年間でした。75歳から100歳まで待ったのです。すべて神のご計画で、そこには神のすばらしい知恵があるのです。残念ながら、人間はなかなかそれを忍耐をもって受け入れられないのです。偏愛の罪、それが最初にリベカが犯した罪でした。

2) 夫でなく子どもを優先した

彼女は夫ではなく子どもを愛したのです。ですから、この一連の出来事を見て行く時に私たちが教えられることは、リベカは自分の息子ヤコブを余りにも愛するゆえに、ヤコブの幸せのことしか考えていないことです。もちろん、親が子どもの幸せのことを考えることは間違っていないです。でも、彼女の間違いは、その子ども幸せのために敢えて主人であるイサクを騙すこともいとわないとしたことです。聖書を見るときに、神は夫婦に関して大切な教えを与えてくれています。夫がいて、その夫を助ける者として妻が与えられています。夫婦の関係はすべての関係に勝るものです。その関係の中に子どもを入れてはならないし、それ以外の何ものも入れてはなりません。それを入れるなら、必ずその夫婦の問題が生じてきます。このリベカがしたことは、彼女は自分の夫よりも自分の子どもを愛し、その子どもを優先したのです。伴侶が一番ではなかったのです。何が起こったのかは分かりません。ただ少なくとも、イサクという人物を見て行くと、もしかすると、イサクは物静かで余り積極的ではなかったかもしれません。アブラハムは長距離を旅しましたが、イサクは余り移動していません。ですから、リベカはそのイサクの性格やいろいろな面に渴きを覚えているのかもしれませんが。いずれにしろ、彼女のナンバーワンはイサクではなく、ヤコブになってしまっていたのです。

皆さん、もしもあなたが神からの祝福をいただきたいと思うのであれば、あなたがしなければいけないことは、神のおことばにしっかりと目を止めることです。主がどのようなことを私たちに教えてくださっているのか、この夫婦の関係において、特に、妻に関してどのようなことが教えられているのでしょうか？二つのことが教えられています。

◎妻への教え

(1) 夫を愛すること

テトスへの手紙の中で、パウロは年配の婦人たちに対して教えを与えました。テトス2：3-5「**同じように、年をとった婦人たちには、神に仕えている者らしく敬虔にふるまい、悪口を言わず、大酒のとりこにならず、良いことを教える者であるように。**」、つまり、年配の婦人たちにしっかりと教えて行きなさいとパウロはテトスに勧めるのです。「正しく歩みなさい。あなたたちがすばらしい信仰者として模範を示しなさい。そうすれば、」と続いて行きます。「**4**そうすれば、彼女たちは、若い婦人たちに向かって、**夫を愛し、子どもを愛し、5** 慎み深く、貞潔で、家事に励み、優しく、自分の夫に従順であるようにと、**さとすことができるのです。**」。大切なことを教えるためにはあなたたち自身がまず模範を示さなければいけないと言います。模範を示した上で、あなたたちは若い人たちに対して、しっかりと夫を愛して行きなさいと、そのように教えることができる。そのためにはしっかりと自分自身が夫を愛し、そして、夫に従って行くことが必要だと言うのです。ですから、まず妻に関してみことば、聖書が教えることは「夫を愛しなさい」です。

(2) 夫に従うこと

この間、ある一人の婦人と話しました。彼女は病気のご主人を抱えて看病しておられます。そのせいで遠出も出来ません。自分たちのその行動の範囲は限られた狭い所だけです。その婦人はこのように言われるのです。「でも、私はこうして主人がいてくれるだけで幸せなのです。私はこの主人から離れたくないのです。だから、間違っていると分かっていますが、神さま、どうぞ主人を取らないでくださいと祈ってしまうのです」と。その気持ちはよく分かりました。どれ程、彼女はご主人を愛しておられるのかということが…。自分よりも何ものよりも主人を愛して、そのような思いをもって接しておられる、神が喜ばれることです。そして、この「従う」ということに関しても、エペソ人への手紙の中でパウロはこのように言いました。エペソ5：22-24「**妻たちよ。あなたがたは、主に従うように、自分の夫に従いなさい。23** なぜなら、キリストは教会のかしらであって、ご自身がそのからだの救い主であられるように、**夫は妻のかしらであるからです。24** 教会がキリストに従うように、妻も、すべてのことにおいて、夫に従うべきです。」、夫に従って行きなさいと教えています。たとえ、その夫がイエスを信じていない夫であってもとペテロはIペテロ3：1-5でこのように教えています。「**同じように、妻たちよ。自分の夫に服従しなさい。たとい、みことばに従わない夫であっても、妻の無言のふるまいによって、神のものとなるようになるためです。2** それは、あなたがたの、神を恐れかしこむ清い生き方を彼らが見るからです。3 あなたがたは、髪を編んだり、金の飾りをつけたり、着物を着飾るような外面的なものでなく、4 むしろ、柔和で穏やかな霊という朽ちることのないものを持つ、心の中の隠れた人がらを飾りにしなさい。これこそ、神の御前に価値あるものです。5 むかし神に望みを置いた敬虔な婦人たちも、このように自分を飾って、夫に従ったのです。」。聖書の教えは明確です。夫がクリスチャンであろうとそうでなかろうと、あなたが神から望まれていることはしっかりとその夫に従って行くことです。そのあなたの従順な態度を見て、主が働いておられるというすばらしい証が為されると、ペテロは教えるのです。

このような教えがあるにもかかわらず、もちろん、これは新約の教えですが、結婚を定められた神がその夫婦に望まれていることは同じことです。創世記2：24で「**それゆえ、男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。**」と教えられています。しかし、残念ながら、リベカはそこに子どもを入れてしまったのです。子どもが彼女にとって最も大切なものになってしまったのです。残念ながら、そのような人は今でもいます。「私の生きがいは子どもです。」と言う人たちがいます。ある人は「私が離婚しないのは子どもいるからです。」と言います。悲しいことです。でも、皆さん、感謝なことに神は私たちに希望をくださいます。それは、神は私たちが望むなら、神の前に喜ばれる者へと私たちを変えて行ってくれるという希望です。神はあなたを生まれ変わらせ、神はあなたを変え続けてくれるのです。残念ながら、あなたの力ではあなたを変えることは出来ません。忍耐には限界があります。愛にも限界があります。なぜなら、私たちは不完全だからです。でも、完全な神が働かれる時に神は私たちを変えて行ったださるのです。そこに希望があるのです。希望は私たちの力ではありません。希望は私たちの意志ではないのです。希望は私たちの神にあるのです。その神に働いていただくことによって、あなたが変わり、そして、今見て来たように、あなたが喜びを持つ者へと変えられて行きます。そして、その祝福は家族に家庭に及んで行くのです。残念ながら、このリベカの罪によってこの家族は後で見ますが、彼女が期待していたような、望んでいたような祝福を得ることはありませんでした。そこには悲しい結果が待っていました。二つ目に私たちが見て来たリベカの罪は、彼女は夫ではなくて子どもを優先したことです。そのような罪を犯してしまったのです。

3) 自分の力に頼った

神に信頼するのではなく自分の力で問題解決に当たろうとしたこと、そこに問題がありました。問題を自分の力で解決しようとしたのです。というのは、この25：23を見ると、妊娠中のリベカは主の前に立ちます。胎児がお腹の中でぶつかり合っているからどうなるのだろうと思って、彼女は主のみこ

ころを求めするために主の前に立ちます。すると、このような約束が主から与えられます。「すると主は彼女に仰せられた。「二つの国があなたの胎内にあり、二つの国民があなたから分かれ出る。一つの国民は他の国民より強く、兄が弟に仕える。」、兄が弟に仕えるという約束を神からいただいたのです。その約束を覚えていたリベカ、もちろん、イサクにもそのことを話したでしょう。ところが、27章に移って行くと、イサクは段々年を取って目が見えなくなって来ました。そこでイサクが考えたことは、長男のエサウを祝福することです。神の約束は弟が祝されるのです。ヤコブが祝されるのです。兄がこの弟に仕えるようになるというのが神の約束だったのです。それを覚えていたリベカは、ここで夫のことば「兄に祝福を与える」ということを聞くのです。そこでリベカはこれは大変だと思って、彼女は主の前に祈ることもなく、自分の考えによって神のご計画を達成しようとするのです。彼女は「神さま、今イサクが考えていることをお聞きになりましたか？彼はあなたのみこころと違うことを選択しようとしています。主よ、どうぞイサクの心に働いてください。」と祈ることが出来たでしょう。まさに、それは人の心を変えることの出来る神を信頼している証です。同時に、イサクにも言うことができたはずですが、妻として、彼女は彼の所に行って「イサク、神の約束を覚えていませんか？神の約束は弟が祝されるという約束だったでしょう？あなたがしようとしていることはその神のおことばと相反することではありませんか？」と。でも、彼女はそのようにはしなかったのです。

イサクの目がかすんで見ることが難しくなっているのです。彼女は考えを巡らせるのです。イサクをだましてヤコブに祝福を与えたほうが神の計画が速やかに成就すると。神の約束を待っていてもそれがいつ実現するのか分からない。だから、今、イサクは祝福を与えようとしているのだから、何とかヤコブをエサウの代わりに連れて来て、彼が祝福を受けるなら神が言われた通り成就するに違いないと、そのように彼女は考えるのです。ですから、この彼女の選択、彼女がしようとしたことには神がないのです。彼女は自分で考えて、そして、神の計画を成就しようとするのです。皆さん、私たちには忍耐がいるのです。最初にも話したように、私たちはこれまでの生活を振り返ってみても、思い通りに物事が進んで来ていません。私たちのスケジュール通りに物事は進みません。でも、私たちクリスチャンの確信は、それでもすべてをご存じであり、何が最善かを知っておられる神が導いておられるということ、ここに私たちは信頼を置きます。この方に信頼を置きます。自分の思い通りにならないからと、私たちは不安に駆られて心配するのでしょうか？いいえ、確かにそのような気持ちがあっても、私たちはそのすべてを支配しておられる創造主なる神にすべてを委ねて、「主よ、みこころが成りますように。そして、それを喜んで受け入れることが出来るように助けてください。」と、そのような祈りをもって主の前に立つのです。忍耐と信頼をもって、神が約束されたことは神が必ず成就される、そのように信じる事が出来ますか？神が言われたことは必ず神が責任をお取りになる、そう信じる事が出来ますか？もし、そうでなければ神ではないでしょう？言われたことは必ず成就される、それが神です。しかし、私たちはすぐに不安になってしまうのです。「神はそうに言われたけれど、本当かな？」と、それが私たちの問題です。リベカは現状を見て自分なりの解決方法を探そうとするのです。そして、神に求めるのではなく、頼るのではなく、神に祈り求めるのでもなく、自分で解決方法を見つけるのです。そこに過ちがあったのです。自分の力でしよう、何とか自分の力で解決しよう、そのような人はここにもいませんか？問題に対して自分で何とかしよう、それは必ず行き詰まります。私たちが学ばなければいけないことは、そのような方法を神は私たちに教えておられないということです。そのような方法を取りたいのは私たちの肉の思いです。なぜなら、私たちが失望することを望んでいるものがあるからです。私たちが失望していたらだれが喜びますか？間違いなく神は喜びません。神の敵が喜びます。だから、私たちに必要なことは、すべてのことを可能にしてくださる神に信頼しなければいけないのです。私たちは神が言われた通りに歩んで行くことが必要なのです。

4) 悪い模範を示した

四つ目は、非常に悪い模範を家族に示したことです。27章から、イサクをだますための策略が記されています。彼らは様々な策略を思い巡らすのです。どうすればイサクをだますことが出来るのかと。エサウは毛深いから子ヤギの毛皮をまとめて父親の前に出たらきっと分からないだろう。また、エサウの晴れ着を着たら、その臭いでだませるのに違いないと、彼らはいろいろな策略を思い巡らします。そして、何と悲しいことに、イサクをだますように奨励したのは母親のリベカだったということです。リベカがヤコブにこのようにしようと勧めるのです。ヤコブは心配でした。27:12「もしや、父上が私にさわるなら、私にからかわれたと思われるでしょう。私は祝福どころか、のろいをこの身に招くことになるでしょう。」と言っています。その時にリベカはこのように言うのです。13節「わが子よ。あなたののろいは私が受けます。ただ私の言うことをよく聞いて、行って取って来なさい。」と。ヤコブの心配に対してリベカは「ヤコブ、そのことは心配しなくていい。のろいが下るならそれは私が受けるから。」と、これは何という励まし、慰めでしょう。しかも、27章41節から、エサウは裏切られたことだまされたことを知

ってヤコブを殺そうとしました。それを知ったリベカは、イサクに嘘をついてヤコブを逃そうとします。そして、イサクをだまして自分の兄ラバンの所に送ろうとするのです。ですから、ここに見られることは、リベカはイサクを何とかだまそうとしたことです。ヤコブに対してもそのようにしました。

その結果どうなったでしょう？ヤコブも27章に記されている通り、二度偽りを言っています。「私がエサウです。神さまが祝してくれたから、私はこんなに早く獲物を見つけて帰って来た。」と。このように親が間違った模範を示すなら、子どもたちは間違いなくそこから間違ったことを学んで行きます。最初に話したように、この罪によって、この家庭に様々な問題が起きました。ヤコブは彼自身が嘘をつく者となって行きます。彼の名前「ヤコブ」とは「だます」という意味があるのです。それに相応しい人物になってしまうのです。悲しいことです。そして、リベカはどうでしょう？溺愛したヤコブに対して、27:44「**兄さんの憤りがおさまるまで、しばらくラバンのところにとどまっていなさい。**」、「しばらく」、短い間とそのように思ってリベカはヤコブを送り出すのです。ところが、その「しばらく」が21年に及ぶのです。そして、聖書を見る限り、リベカはこの後一度もヤコブに会うことはありませんでした。これ程愛したヤコブ、彼のためにとと思ってしたことは神のみこころに背いたことでした。そこに祝福はなかったのです。自分の思う通りに、自分が考える最善と思うことをしても、主のみこころに反することには祝福はないのです。私たちは悲しい結果をここに見るのです。

今日のレッスンは何だったでしょう？この一連の出来事は私たちに、あなたは主に対して忠実にあり続けなさいということを教えてくれます。アブラハムのしもべがそうでした。彼は神に対して忠実に生きました。そして、このリベカも最初はそうでした。結婚に関して、主のみこころを信じ、そして、喜んで犠牲を払って従って行きました。イサクもそうでした。主が語られることに対して忠実に従った者でした。でも、問題は何でしょう？忠実であったこの人たちがその後も忠実であり続けたどうかです。神が忠実なあなたに望んでおられることは、あなたがこれからも忠実であり続けることです。主があなたを助けてくださる、でも、あなたは主の前に決心しなければいけません。「主よ。私はそのように生きて行きたいです。残された地上の人生をあなたのみこころに忠実に従って行きたい。だから、私を助けてください。」と。その時に、主はあなたを助けてくださいます。主が望んでおられるのは、主のみこころに忠実に従って行く人たちです。あなたはどのように生きて行きますか？

どうぞ、主に忠実に従い続けてください！主の栄光が現わされるために！